

モラエスの2人の日本人妻

田端里美

ヴェンセスラウ・デ・モラエスという方をご存知でしょうか。彼はポルトガルの海軍士官であり、明治期の日本文化研究者として多くの著作を残した人物です。公務で何度か来日する機会があり、そこから神戸にポルトガル領事館が開設されると、彼は在神戸・大阪副領事として日本に住むことになりました。

そして彼が日本に移住してから出会った日本人女性が「おヨネ」と「コハル」です。

おヨネは本名を福本ヨネといい、1875（明治8）年に徳島県富田浦町（現徳島市）で生まれます。福本只蔵とカツの三女として生まれ、彼女にはおヨとユキという2人の姉がいました。おヨネは目鼻立ちが整っており、芸者という職業柄いつでも相手のことを気遣うような慎ましい女性でした。

彼女がモラエスと出会ったのは芸者をしていた時ではありましたが、詳しい出会いについては不明のままです。モラエスは彼女に惹かれ、何度もおヨネのもとへ通いますが、彼女は自分が病気がちであることや教養のないことなどを打ち明け、彼の気を逸らそうとしました。しかし、それでも彼のおヨネへの真摯な情熱は変わることはありませんでした。

そして彼女が1900（明治33）年にモラエスとの結婚を決めた時、おヨネは25歳、モラエスは46歳でした。純日本式の結婚式を挙げ、彼女は毎日領事館や家の中を片づけたり、モラエスの身の回りの世話をしたりと、よく働きました。モラエスは20歳も年の離れたおヨネのことをとても可愛がり、女神のように大切にしていたと言われています。

1912（明治45）年におヨネが心臓病で亡くなると彼女の墓石を建立し、昇進していた総領事の職を辞します。そして彼女への追慕に生きるため、おヨネの故郷である徳島に移り住むことに決めました。その移住先の徳島で親しくなったのが、モラエスの日本での2人目の妻、コハルです。

コハルはおヨネの姉であるユキと斉藤寿次郎の娘

として1894（明治27）年に生まれます。おヨネの生前、彼女の病気が悪化すると、度々、ユキや姪のコハルが徳島から神戸に駆け付け、看病をしていました。そのためコハルは、モラエスとは結婚する以前から面識がありました。またおヨネがつけていたモラエスから贈られた金の指輪は彼女の形見としてコハルに手渡されています。

モラエスとコハルの関係が正式にいつ始まったのかは定かではありません。しかし、おヨネを失い、傷心していたモラエスにとって若く健康なコハルは、沈んでいた気持ちを晴れやかにさせてくれるような存在となっていました。彼らが1913（明治46）年に同棲を始めた時、コハルは19歳、モラエスは59歳と、40も年が離れていました。そのためコハルとは結婚はせず、いわゆる現地妻という形で生活を共にしていました。

2人の暮らしは1916（大正5）年にコハルが結核で亡くなるまで続きました。モラエスは彼女の墓石を建てると、コハルの母であるユキに自分が亡くなったからコハルのお墓と一緒に入れてほしいと頼んでいたそうです。

日本での2人の妻であるおヨネとコハルがいなくなってしまうと、モラエスはユキに生活の手助けをしてもらいながら、1929（昭和4）年に事故で亡くなるまで、徳島で質素な生活を送っています。

前号のハーンとその妻セツと同様に外国人との結婚は、当時、奇妙で軽蔑の対象として見られていました。それでもモラエスが亡くなるまで日本で過ごし、日本文化研究者として執筆活動が続けることができたのは、おヨネとコハルという2人の日本人女性との出会いを通して、日本への興味を深めていったからだと思われます。そして彼女らの亡き後も、ユキを含めいろいろな人に支えられたことで、日本に対する思いを強く持ち続けていたのではないのでしょうか。

■参考文献

- ヴェンセスラウ・デ・モラエス：岡村多希子訳『おヨネとコハル』彩流社、2004年。
- 林啓介著『「美しい日本」に殉じたポルトガル人：評伝モラエス』角川書店、1997年。

たばた さとみ（司書・非常勤職員）